

近代の文學 前期

日本文學講座

V

河出書房版

近代の文學 前期

V

日本文學講座 第五卷

昭和二十九年十月三十日 初版發行
昭和三十年六月十五日 再版發行

定價 貳百參拾圓

著者代表

片岡良一 かたおか りょういち

發行者

河出孝雄 東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者

小泉輝章 東京都文京區戸崎町七一

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出書房

振替口座東京一〇八〇二番
電話東京(29)三七二一番

目

次

近代社會と文學……………	片岡良一……………
政治小説……………	柳田泉……………
硯友社と寫實主義……………	瀨沼茂樹……………
「文學界」と浪漫主義……………	勝本清一郎……………
寫生文の展開……………	福田清人……………
社會主義小説……………	木曾隆一……………
西洋文學の影響……………	土方定一……………
漱石と鷗外の位置と役割……………	中野重治……………
近代短歌……………	藤川忠治……………
近代俳句……………	中島斌雄……………

新體詩……………神田秀夫 二

(作家研究)

坪内逍遙……………正宗白鳥 一五

森鷗外……………高橋義孝 一六

夏目漱石……………本多顯彰 一七

幸田露伴……………湯地孝 一八

尾崎紅葉……………塩田良平 一九

二葉亭四迷……………長谷川泉 二〇

樋口一葉……………成瀬正勝 二一

泉鏡花……………村松定孝 二二

近代の社會と文學

片岡良一

近代の社會と文學

片岡良一

るものとならずにはいなかった。没落士族階級の出身である主人公が、そういう人間らしい「頑固さ」——一種の自我の強さと誇りとを持つが故に、新しく織りこまれかけた官僚機構からはみ出させられてしまうと同時に、そうした政治機構の中に住む世俗一般からも浮いて、空しく天井の木目でも眺めているより仕方がなくなっているかたちを描いた「うき雲」など、殊にはつきりとそれを感じさせるものになろう。鷗外の「舞姫」にも或る程度までそれと相似た主題的追求が認められるし、人間のまことか戀愛——つきつめられた感情的眞實とかいふものゝ、極めてはかないものでしかないことをなげいた「うたかたの記」などでも、やはり、それと分ちがたい主題的關連のあるのを思わせずにはおかない。その頃の悲觀的氣流とはそう多く相渉らなかつたと書いた露伴の出世作「風流佛」(二十二)でも、主人公珠連の戀は、維新の際の戰功によつて今は子爵に叙せられているという、軍人華族が官僚貴族か知らない、とにかくそういう人間の身分と家柄とにさまたげられて、現實的には實を結び得ぬものになつていたのである。精根こめてほりあげた木像に魂を入れるという神秘主義的處置によつて、そういう悲劇を悲劇ではない喜劇的結末にぼかしこんでいるところに、觀念的理想主義とよばれたこの作者の特異な作風があつたわけだが、それにしても、「露團々」(二十一)のような底ぬけの明るさを以て出發したこの作者でも、この期に於ける出世作としては、やはりこういう問題に少くとも觸れたところのある作品を持たねばならなかつたのである。文學と時勢相との關連を深く考えずにはいられぬわけだと思ふ。

然も、そういう悲觀的傾向を代表する「うき雲」や鷗外の諸作によつて、わが國近代文學の歴史が開かれたのであることが、近頃ようやく定説化されそうになつてゐる。そういう見方で云えば、わが國の近代文學は、解放を求める人々の意欲が政治的に閉ざされているという社會的な不幸を、見つめるところから出發したものであつたことになる。「うき雲」とか「うたかたの記」とかいう種類の、一見して或る頼りなさとはかなさを感じさせずには置かぬような表題の作品が、その歴史の發端に於ける最も重要なものであつたところに、近代日本文學

史の不幸なすがたが、だからまず象徴的に表現されていたとも云えるのだつた。

と云つても、そういうところから出發した近代日本文學も、次いであらわれた北村透谷の時代になると、のしかゝる梗塞の重さに對してはげしい反抗を示すようなものになつてゐる。閉じきられた世界にせめてものくつろぎや救いをもたらそうとした、云わば封建的庶民の逃げこみ場所のようなものであつた粹とか俠とかいうものをさえ、この進歩的自由主義者は強く否定したのである。その闘いの急進性と熾烈さと思わせるに足りるのではないかと思うが、然しそうしたはげしい闘いも、彼自身それを鋭く意識せずにはいられなかつた通り、結果的には空しく「空の空を撲つ」ものとならずにはいながつたのである。そういう實感をもらした「人生に相渉るとは何の謂ぞ」(二十六)に於て、だから彼は、文士の闘いとは、現實世相とは相渉らぬ、従つて目に見える勝利をたずさえては歸らぬ戰士の闘いのようなものだ、規定することになつた。人間の解放と自由とは、そうして現實の世相とは相渉らぬ、「想世界」と「内部生命」の世界とにのみあり得るもので、現實の社會はどうてい人間解放の場などではあり得ぬものだ云うのである。主觀的な意義づけはとにかく、客觀的にはこれは極めて深刻な絶望だつたと云わねばなるまい。二葉亭の諦視に一步を進めて、正面から闘いを挑んだ彼が、それ故にまた二葉亭の疑惑や危懼を越えて、こういう絶望につき當らねばならなかつたところに、社會的梗塞の壁の厚さが今更に感じられていいことになるのだと思う。

尤もこういう透谷風の、はげしくて鋭くはあつたけれど、一面云えば敗北的なものでしかなかつた高踏的な考え方も、日清戦後のブルジョアジイの進出につれて、また或る程度修正されてはゐる。透谷風の敗北的浪漫主義がやゝ健全に建直されて、浪漫主義思潮の擡頭が顯著化するともに、文學者の「文明批評家」たるべきことが——つまり人生に相渉るべきことが、強く要請されるようになったのである。一方、正岡子規の「芭蕉雜談」(二十六)や「歌よみに與ふる書」(三十一)などによつても明瞭なように、そうして人生に相渉るべき批判の基準

は、人間個人の煮つめられた内部的眞實にあることが、強く押出されるようになってゐる。それだけ人間個人が權威化されたわけだし、その究極が與謝野晶子の「みだれ髪」(三十四)や高山樗牛の「美的生活論」(同上)などを生むことになつたのであることは、恐らく周知であらう。そこにその期に於けるブルジョアジイ支配階級化の事實が端的に反映させられていたわけだし、そういう事實に對應するものとして、社會主義思想の漸次的な強化も、この期に於て認められることになつたのであつたけれど、それにもかゝわらず、「養子」(二十六)の論などを書いて透谷とともにそういう風潮に先驅した上、この期に於ける最も知的な浪漫主義者だつたと云われる國木田獨歩は、例えばその作「惡魔」などに於て、利那的忘我ともいへば陶酔の狀態こそ、人間にとつて至高絶對の實在なのだと言つてゐる。そういう利那的忘我的な陶酔の感覺以外に、全自我解放の喜びを味い得なかつた點では、それは透谷の内部生命の尊重などと直ちに結びつくものだつた。「特殊な國情」という言葉にこめられた絶對主義權力の絶對さが、わずかばかりのブルジョアジイの進出ぐらいのことでは、あまり揺らぎもしなかつたのである。だから、全自我解放の感覺を求めて利那的忘我的尊重にまで陥つた獨歩は、一方から云えば宿命の逃れがたさを思う「女難」(三十六)や「運命論者」(三十六)のような作品の作者でなければならなかつたのである。その時代の文學一般が早くも或る程度まで頹廢を相貌することにならざるを得なかつたのである。頹廢文學がいろいろな意味でまた利那的忘我的な陶酔を追うものであることを思えば、それが透谷の「内部生命論」や獨歩の「惡魔」などとも、極めて近接した地點にあつたものであることも、容易に考えられよう。透谷から獨歩へという浪漫主義上昇期の文學さえ、こうして實際は常に顛落への危險に見まわれつづけてゐるようなものとして存在していたことになるのである。あらゆる世俗から浮いて、天井の木目でも眺めているよりほかないような人間の文學として發足せざるを得なかつたものには、やはり容易に明るい飛躍はあり得なかつたのである。それが避けがたい歴史的必然であつたからこそ、その間にあつて最も明るく積極的な側面を代表するものであつた晶

子の「みだれ髪」や樗牛の「美的生活論」はその積極性に於てこそ大きな意義を持つものゝ、文學的な質量感や眞實性に於ては必しも十分な熟達を持つものとなり得なかつたのである。主張乃至意欲としては明るいものがあり得ても、それが生活化された實感に裏づけられたものとしての渾熟を持つまでには、終に到り得なかつたのである。そのかわりに、その頃の川上眉山などからはじめて、これは話が少し飛躍し過ぎるけれど、とにかくつと後の太宰治などにまで及ぶ頽廢文學の系列には、この時代として最も鋭く生々しい、それだけ注意さるべき作品の數々が見出されるのだつた。そういうものこそ文學として醇の醇なるもので、健康に調和的な世界を描いた作品など、明る過ぎた觀念主義の通俗文學だとするような考え方さえ、どうかすると生れかねなかつたほどの歴史が、そういうところに續いたのである。その出發點に於て見つめられた問題と悲劇性とは、こうしていつまでも克服することが出来なかつたのである。

筆が滑つて頽廢文學のことなどにまで觸れてしまつてみると、今更後もどりするようなかたちになるけれど、とにかくそういう近代文學にとつて半宿命的なものであつた社會的制約の乗越しがたさが意識化されて、それに對處するための主體的な工夫がいろいろと試みられるようになったのは、やはり自然主義乃至その時代以來のことであつたし、そうなるべき必然が、近代文學史上「うき雲」につぐ第二の飛躍的な發現だつたと云われる島崎藤村の「破戒」(三十九)にも、いち早く露頭していたのではないかと思う。

あの作は、不當な身分的制約に壓しつけられていた主人公が懊惱の末ともかくにもその制約を破つて出るかたちを描いたものだつた。そういう設定の積極性に於て、それは確に「うき雲」などの世界を乗越えたものだつた。追いつめられたまゝ天井の木目を眺めていた男が、決然として立上つた——少くとも立上ろうとしたのである。その積極性に於て、それはその前にあつた木下尚江の社會主義小説「火の柱」(三十七)や「良人の自白」

(同上—三十九) などをもうけつくものだった。尙江もまた透谷からの強い刺戟に出發した人であつただけに、彼の敗北的浪漫主義がこういふところに出て來たかたちにも、いろいろのことを思わせるものはあるわけだ。その結論に於てこそ敗北的であつたものの、彼が二葉亭の諦視から疑惑へという動きに一線を劃して、強く積極的に闘おうとする態度を示したことが、云うまでもなくこういう展開への第一歩であつたのだから。

が、そういう透谷の闘いが結局は敗北的な境地への後退をよぎなくされたのと同じように、こゝでその火をついだ尙江の場合もやはり結局は宗教的得脱を思うところにそれてしまつたし、藤村の「破戒」に到つては、決然として立上つたはずの主人公が、いざという場合になると、自分の教えていた子供の前に土下座して、額を床にすりつけてそれまで身分をかくしていた罪を詫びるということになつてしまつてゐるのである。決意や意欲はあつても實際には一向強く生きられない人間のすがたが、こゝにもまた期せずして露呈されていたことになるのだというほかはないわけだろう。この主人公は同族大日向に拾われて、遠くテキサスに渡ることになつてゐるけれど、そういう都合のいゝ拾い手がなかつたら、その告白の場面が暗示する通り、やはり懺悔得脱の宗教的境涯にでも入るのだから、始末のつけようがないことになるのではないであらうか。當然そこにはそういう問題に對する何等かの生の工夫が豫想されてよかつたはずなのである。

そういうことを思わせる作品の出たのが、明治三十九年のことであつたのも、偶然ではなかつたように思われる。三十九年という年は、日露戦後のいわゆる國內再整備を経た資本主義が、明かに帝國主義の段階に入りはじめた年だつた。遅れて世界の競争舞臺に乘出したわが國の資本主義は、早くから寡頭支配と帝國主義への傾きとを示していたのであつたが、それが日露戦争中の飛躍的な發展とそれ故にぶつかつた國際狀勢に對應するための國內的整備とを経て、ようやくはつきりしたかたちを整えはじめたのである。そういう新體制の整備にともなう發展の見通しが、少くとも表層的には或る程度の時代氣運の積極主義化を生ませたのであつたらしい。藤村の「破

戒」に示された飛躍的氣構えがまずそれを思わせるものであつたばかりでなく、夏目漱石などでもこの年の作である「坊つちやん」その他でそれまでの作品と比べれば格段に明るく積極的なものを示すようになっていたし、そういう漱石の作品や獨歩の諸作を「破戒」と一括して、そこに新しい浪漫主義の擡頭を期待した人さえ、その頃の評家の中にあつたのである。が、それが單純にめでたいばかりの發展期であつたのではなく、民衆一般への梗塞は必然的に増大せざるを得ない寡頭支配への轉換期であつたが故に、そうした明るい積極主義化の氣運は極めて短い間の閃きに過ぎず、翌四十年の聲をきいてその新しい社會體制にもかゝわらず不景氣が一般化し、農村恐慌があらわれたのと並行して、その氣運も容易に萎縮してしまつたのであつたことは、「破戒」の成立に象徴された新文學運動の積極主義化が、四十年にはその代表作として田山花袋の「蒲團」を持ち、四十一年初頭には獨歩が早くも「二老人」や「竹の木戸」の諦觀を示すというような、尻すぼまりなものになつてゐることによつても明瞭だらう。その間にもなお「坊ちやん」以來の積極的な氣組を持ちつゞけた漱石の「野分」(四十)や「虞美人草」(同上)は、前に見て來た「みだれ髪」や「美的生活論」の場合よりもつと觀念的な、具體的な肉附けと眞實感との乏しいものにならざるを得なくなつていた。そういう空廻りを必至とするような轉換期であつたからこそ、勢こんで立上つた「破戒」の主人公も、いざとなるとよろめいて、額を床にすりつけるようなことにならざるを得なかつたのである。「罪と罰」の模倣が、こうして期せずして時代の眞實に正しく觸れることになつたのである。

そういうことを思う時、その「破戒」とほぼ同じ時に書かれた漱石の「猫」(三十八・九)が、そういう時代の感覺や心情を、最も鋭く端的に示していたものと云えるのではないかと思う。あの作で作者は、どちらを向いても明るい見通しのない世相に對して、一面やみくもに腹を立てゝいる。「何も彼も癪にさわつてたまらない」のである。にもかゝわらず他の一面では、幾ら腹を立てたところで何がどう出来るのでもない自分自身の無力さを、

痛感している。その怒りと無力感との矛盾が、彼をそれよりほかにどうしようもない笑いにかり立てゝいるのだが、そう思うとその笑いは、勢こんで立上りながらさていざとなるとよろめいて地に這つてしまつた「破戒」の主人公のすがたを、自分自身のうちに見た作者が、それを自ら笑つてゐるようなものだつたと云えるのではないか。そこにその頃として最もつきつめられた心境の表現があつたとも云えそうなのである。

とすると、そういうところから出發した漱石が、途中いろいろの紆餘を経ながら、結局則天去私の半宗教的得脱に赴く以外、心境の安定は期すべくもないことを思うに到つた過程が、既に「破戒」の結末にも暗示されてゐたその頃の課題に、正しく應えたものになるわけだろう。「大津順吉」(大正元年)などに於て、そういう漱石の闘いを或る程度繼承したかに見えた志賀直哉の、やはり或る程度宗教的な心境鍛練を目ざした「暗夜行路」(大正十

一昭和十二)が、そういう道筋に於ける究極的な達成として、この時代を記念すべき代表作となつてゐるのも、決して偶然ではなかつたことになる。それだけそれが手も足も出ぬ梗塞に對する新しい生の工夫として一つの典型的なものであつたことになるわけだが、前に見て來た浪漫主義上昇期も、同時に内村鑑三や綱島梁川などの顯著な活動の見られた宗教的傾向の色濃い時代で、尙江などもつまりはそういう氣運の中にいた人であつたことになるのだから、確立期以來の近代日本文學は、こうしてほとんど常に宗教的なものをその身近に持つていたことになるのであつた。その歴史の發端に立つ人の一人であつた幸田露伴や、或る意味でその末端に立つ人であつた嘉村礒多が、しじゅう佛教を身近に引きつけていたのであつたことなども、そう思えばかなり象徴的なものであつたことになるわけだし、頽廢を一つの必然としたほどの社會に、しじゅう頼りない生の不安にさらされていた人々のこととすれば、それもまた是非ないことであつたのかも知れないと思う。

そういうことと並行的に、「破戒」を直接その先頭に立つ作品とした自然主義が、結局徳田秋聲の諸作をその結論的なものとして持つようになつたことなどについても、一通り考えて置く必要があらう。と云つても、それ

が自然主義文學としてたゞ一筋の展開であつたのではなく、梗塞を破つて出ようとして上記の通りよろめいてしまつた「破戒」に次いで、その破りがたさを見つめたような「蒲團」が出た後、自然主義にもより以上に積極的な展開がなかつたのではなかつた。近頃あまり評判のよくない花袋にしたところで、「生」（四十一）や「田舎教師」（四十二）では、「蒲團」の場合より幾らかはつきりした闘いの姿勢とそれに呼應した批判的態度（或は對象把握）を示しているし、「春」（四十一）で「蒲團」の行き方に同調するかに見えた藤村も、次の「家」（四十三）では周知の通り家の問題を深く追求した。そういうところに自然主義らしい發展があつたわけだが、然しそうした追求の前に何等の明るい見通しも可能性も望見されず、その結果藤村には「まだ夜は深かつた」となげかせ、花袋には浪漫主義時代の獨歩のそれにも似た宿命觀のようなものを抱かせるようになってみると、早くから無力感に徹して「不幸を信ずる」（中村光夫の評語）ほかなくなつていた秋聲の世界が、最も深く到り着いたものとして大きく前面に押出されて來ずにはなくなつたのである。梗塞を破つて出ようとした自然主義の文學とすれば、それは明かに敗北であつたと思うけれど、それが漱石やます漱石風の闘いに出發しながら「暗夜行路」の心境鍛練を結論とした直哉の道なども、並行的なものでなかつたとは云えまい。「微」（四十四年）でまずそういう心境をはつきりと示しはじめた秋聲は、その後だんだんという云わば消極的な強さに徹して、不幸とさまざまな問題とを無解決なまゝに背負つて生きて行く人間の陰翳多い生のすがたを、靜かに突放して描く心境のすみを獲得するようになった。その絶頂に生れたものが「縮圖」（昭和十六年）であろう。主人公の年立に少し無理があつたようだけれど、民權運動華やかなりし頃から大東亞戰爭下に至るまでの世相の推移とそこにあつたさまざまな問題とが、主人公等のすがたを通して淡々と語られている。そこに示されたような心境の靜かな強さと、「暗夜行路」のそのような高さとを、その最もみごとな達成として持つことになつたところに、内部生命や忘我的な陶酔感にのみ生のよろとびを味あふとちよかも出盡した近代文學が、それぞれの仕方て現實と相渉つた果のみの